



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ボヘミアの森の文学・シュティフター『白雲母』における木と人間                                                    |
| Author(s)        | 岡崎, 朝美                                                                            |
| Citation         | 独語独文学研究年報, 35, 1-20                                                               |
| Issue Date       | 2009-03                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/38099">https://hdl.handle.net/2115/38099</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 35_p1-20.pdf                                                                      |



## ボヘミアの森の文学・シュティフター『白雲母』における木と人間

岡崎 朝美

### 1 はじめに

アーダルベルト・シュティフター作品集『石さまさま』のなかの『白雲母』(1853)は、ハシバミの茂る「ハシバミ山」(Nußberg)が、物語の中心的な舞台となっている。この「ハシバミ山」とその周辺には「ハシバミの実」「ブルーベリー」のように季節をあらわす植物があり、季節やその移り変わりに関する表現が、多くあらわれている。

季節を直接あらわす語、「春」(Frühling)「夏」(Sommer)「秋」(Herbst)「冬」(Winter)の数を、『石さまさま』のなかの他作品と比べてみると、『白雲母』が最も多いことがわかる。<sup>1</sup>さらに、『白雲母』には、季節を直接あらわす語だけでなく、「忘れな草」「トンボ」「麦藁帽子」「カケス」「霧」「霜」など、日本の俳句の季語に相当する表現が多く出てくる。

カロール・ザウアーラントはシュティフター文学と時間について以下のように述べている。「生活を四季にあわせていかなければならない農民、雷雨が重大なデータとなる山国の人、祝いの日が記念日であり思い出の日になる素朴な人、そういった人間たちの時間。時間と自然は、シュティフターの作品のなかで一致している。時間を自然のなかの変化に見ることができる。その自然の変化が繰り返し同じ性質を担うため、時間は、永遠の循環として、また、同じことの恒久の再現として、感じ取られる。春、夏、秋、冬は、繰り返してやってくる」<sup>2</sup>。クラウディオ・マグリスマ、「郷土文学」にシュティフター文学を分類するなかで、

1

|     | Frühling | Sommer | Herbst | Winter |
|-----|----------|--------|--------|--------|
| 花崗岩 | 5        | 3      | 4      | 2      |
| 石灰石 | 1        | 3      | 0      | 3      |
| 電気石 | 2        | 1      | 1      | 3      |
| 水晶  | 2        | 11     | 3      | 15     |
| 白雲母 | 6        | 24     | 12     | 13     |
| 石乳  | 0        | 1      | 3      | 4      |

数字は、「夏の暑さ」(Sommerhitze)等の複合語を含む。

<sup>2</sup> Karol Sauerland: Zeitbewältigung und Zeitüberwindung. In: Adalbert Stifter Institut, Vierteljahresschrift. Jahrgang 41. Folge 3/4. Stifter Symposium Linz 1978. Nachdruck der Erstausgabe 1979. Linz (Landesverlag) 1992, S.33.

「都会の墮落」と対立する「田舎」を舞台にした作品にあらわれたものの一つとして「永くなる四季の移り変わり」<sup>3</sup>を挙げている。クリスティアン・ベージェマンは、『白雲母』における家族の生活は、完全に自然のリズムにあわせているように思われる。描写される時間は、自然の時間なのである<sup>4</sup>とし、「四季の移り変わり」や「植物の時季」によって時間が記述されていると述べている。シュティフター文学のなかの四季については、小名木榮三郎も、四季を楽しむ日本人との関連で言及し、「ボヘミア出身のこの詩人の生涯にわたる自然との対話に、日本人は大きな共感と親近感を覚えて参加する」<sup>5</sup>と述べている。

このように作品全体に流れる四季という時間について言及・分析されるなかで、その四季の変化を示す植物などがある空間・場所は、「自然」という総合的で大きい枠のなかでとらえられる傾向があるように思う。『白雲母』のなかのそのような空間・場所は、主として「ハシバミ山」である。本稿では、この「ハシバミ山」を「自然」という大きな枠でとらえる前に、まず、「ハシバミ山」という場所そのものに着目し、この場所の持つ特性や意味を考察したい。その後、改めて、「ハシバミ山」を含む「自然」の流れについて、考察を加えたい。「ハシバミ山」の考察は、作品におけるハシバミという木の役割やシュティフターの描いた「木と人間との関わり」を明らかにすることにもつながると思われる。

## 2 高い場所にある森ー山と森との関係

作品の冒頭で、ある農園の周りの風景や気候が詳細に描写される。この冒頭部分の風景描写には、まだ「ハシバミ山」や「ハシバミ」は出てこない。しかし、森の位置や森を構成する木の種類についての描写があり、この地方の森の特色が描き出されている。この物語の舞台となる地方の森は、「高い」位置にある。

砂地斜面を登ったら、そこに一つの岩が聳えている。[...]その岩の背後の北の方向へ、茂みが広がっている。それからさらに先の上り勾配になっているところに、オークや白樺がいくらかあり、その先に、頂上を占める針葉樹の森がある。そこで、この光景はしめくくりとなる。(KTS 244)<sup>6</sup>

---

<sup>3</sup> Claudio Magris: Der habsburgische Mythos in der modernen österreichischen Literatur. Wien (Paul Zsolnay) 2000, S.170. [初版: Turin (Giulio Einaudi) 1963.]

<sup>4</sup> Christian Begemann: Die Welt der Zeichen Stifter-Lektüren. Stuttgart u. Weimar (J.B. Metzler) 1995, S.304.

<sup>5</sup> Eizaburo Onagi: Adalbert Stifters Werk in japanischer Sprache. Zu den Übersetzungen eines halben Jahrhunderts - von Julius bis Witiko. In: Adalbert Stifters schrecklich schöne Welt. Brüssel u. Linz (A. Stifter Institut) 1994, S.101.

<sup>6</sup> Adalbert Stifter: Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. von Alfred Doppler und Wolfgang Frühwald. Stuttgart u.a. (Kohlhammer) 1982, Bd.2,2.に拠る。『白雲母』„Katzensilber“を以下、KTS と略記。同書からの引用は本文中に頁数を示す。

丘の頂上はどこも森になっている。申しあわせた規則にしたがっているかのように丘の頂上は森に覆われているのである。

丘と丘の間は、しばしば予測できないほど傾斜して険しい峡谷となっており、小川、ときには激流が流れている。(KTS 244)

森が丘の頂上に達していた。(KTS 247)

砂地斜面を登って、さらに「上り勾配」になっているところに、木々が生えており、さらに上に森がある。山のような高いところに森があることがわかる。「丘」という表現が使われる場合も、その丘は、しばしば「険しい峡谷」をつくるほどの急な傾斜を持つ。丘の頂上は、「規則」であるかのように、必ず森になっている。<sup>7</sup>

この地方全体は北方向にいくにしたがってどんどん高さが増し、そこに、もっと大きくて薄暗くて広々とした森がいくつかあらわれる。その森がボヘミア地方のはじまりを意味する。南の方向には、好ましい青色をした高山の連なりが空にのびているのが見える。(KTS 244)

高みに大きい森があることが示されている。ハシバミ山と呼ばれる山は、高い場所にあ

---

<sup>7</sup> シュティフター自身が描いた絵に、丘が描かれているものがある。この絵のなかの丘は、『白雲母』の舞台になっている丘とは異なるが、絵のなかの丘の端や頂上に木々が描かれ、頂上が森になっている様子がうかがえる。



『教会のある風景』 1823-1825 年頃  
Franz Baumer: Adalbert Stifter - der Zeichner und Maler. Passau (Passavia)1979, S.21.

る森ともいえる。実際に、「ハシバミ山」という語が最初に作品に出てくるとき、「高い」という形容詞がつき、「高いハシバミ山へ」(auf den hohen Nußberg)(KTS 246)となっている。「ハシバミ」(Haselnußstauden)等の木々が生えている場所を目指して、子供たちと祖母は、ハシバミ山に「登る」。ただし、ハシバミ山は、子供たちが登る様子から、家の周りの他の丘より高く、子供たちが行ける範囲のなかでは最も高いという程度の高さであると推測される。<sup>8</sup>ハシバミ山には、「ハシバミ」の他に、「ハンノキ」(Erlen)「トネリコ」(Eschen)等が生えている。枝の間をぬって「カケス」(Heher)<sup>9</sup>が飛び、高い枝の上に「リス」(Eichhörnchen)が登る。

子供たちの家の近くにも樹木はある。家の近くでは、子供たちの父親が、この地方の気候や土壌にあわせ、「ダークチェリー」(schwarze Kirschen)「サワーチェリー」(Weichseln)「ナシ」(Birnen)「リンゴ」(Äpfel)といった果樹を植えて、育てている。しかし、木々が多く茂る森はもう少し高いところにあるものとして描写されている。特に目的地である森は、子供たちの住む場所のすぐそばにはない。そのことが高さの点からいえることは、作品のなかで重要な意味を持つ。以下では、「高いハシバミ山」での子供たちの様子を手掛かりにし、山・森・木と人間との関わりをみていきたい。

<sup>8</sup> 物語の舞台は、オーストリアのミュールフィアテル(Mühlviertel)地方[なかでも、チェコやドイツとの国境に近い地域]がもとになっているといわれている。

Adalbert Stifter: Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe, Apparat und Kommentar. Hrsg. von Walter Hettche. Stuttgart u.a. (Kohlhammer) 1995, Bd.2,4., S.180.



Stefan Fröhling u. Andreas Reuß: Böhmerwald und böhmische Bäder. Köln (DuMont) 1996. In der vorderen Umschlaginnenklappe: Übersichtskarte Böhmerwald

<sup>9</sup> 原文のまま。Heher (= Häher)

### 3 山・森・木と人間との関わり

#### 3.1 成長の場

ハシバミ山は高い場所にあるので、子供たちは体力がつくまで成長しないとこの山に登れない。

子供たちが大きくなって、丘や谷を越えて歩いて行けるほどになり、小さな体もすうらりとしてきて、動きも敏捷になったので、子供たちは祖母といっしょに高いハシバミ山に(auf den hohen Nußberg)登った。[...] ハシバミの実(Haselnüsse)は色づき、ふっくらとした部分が茶色や薄紅色になっていた。(KTS 246)

祖母はまだ小さな弟のそばにいてやらなければならなかったもので、姉たちは祖母といっしょに高いハシバミ山に行くことができなかった。子供たちは、他の人と行くことは許されてなく、家の周りで過ごさなければならなかった。姉の二人は、庭の果樹を眺めたり、ガラス温室のなかで花を観察したりした。

けれども、小さな弟が二度冬に大きな車で街へ行き、二度夏に再び帰ってくると、姉たちや祖母といっしょに周りを歩けるぐらい丈夫になっていた。みんなで畑を歩いたり、森のなかに行ったりして、足を鍛えた。それから、高いハシバミ山に登った。(KTS 254)

「高いハシバミ山」に登れるかどうか、子供たちの成長のバロメーターになっている。ハシバミ山に登ると、そこには、たくさんのハシバミが生えている。

子供たちは、ハシバミ山に登った。ハシバミ山は、全体がぐると円形状になっていて、頂上は尖っており、麓には岩がある。そして、茂みが多い。白樺、ハンノキ、トネリコがあり、そして、数え切れないほどたくさんのハシバミ(die vielen vielen Haselnußstauden)がある。(KTS 250)

子供たちはハシバミ山でハシバミの実を採る。そのときは採取の道具である棒を持っていく。この棒もハシバミの木の枝でできている。

一方の手に、子供たちは、小さなカゴを持ち、もう一方の手に、ハシバミの枝(die Haselzweige)を下方にたわめることができるように、鉤のついた白い棒を持った。この棒は、それ自体、ハシバミの木から(von einem Haselstrauche)作られたもので、樹皮は剥がされている。(KTS 246f.)

子供たちはこの棒を使い、実を採取し<sup>10</sup>、カゴに入れて家に持ち帰る。ハシバミは子供たちにとって身近なものであり、子供たちはハシバミの木を見て、触って、実を採って、食べる。祖母は、実が高いところにある場合は、採って子供たちに渡すのではなく、「子供たちの手」(die Hände der Kinder)(KTS 252)で採れるよう、枝を子供たちの手の位置に向ける。そして、祖母は、子供たちが採るまで待つ。ハシバミ山は、子供たちが樹木に実際に接する場所になっている。

山で子供たちが雨に少し濡れたとしても、祖母は、そのことで風邪をひくという考えにならない。

「最悪の場合でも、秋の霧雨がやってくるぐらいで」と、祖母は考えた。「たいしたことにはならない。子供たちは雨に濡れることに慣れているし、雨に濡れることは、むしろ子供たちの健康のためになるくらいだから。」(KTS 261)

祖母は、雨に濡れることは体を強くすることにつながると考えている。

また、ハシバミ山は子供たちの知見を広める場となっている。ハシバミ山の頂上を目指して登っている途中で、あるいは、ハシバミ山で、子供たちは祖母からさまざまな「おはなし」を聞く。

「あの森の頂上の向こう側の白い雲が流れているあたりに、ハーゲンブーヒャーの家がありました。」(KTS 247f.)

という出だしで始まるおはなしもあれば、以下のように始まるものもある。

「ほら、子供たち、見て。ガルブルナー森が終わっているところ、そこにかすかに何かが聳えたっているでしょう。」(KTS 248)

祖母は遠くの森を指し示しながら、その場所にまつわるおはなしをする。これらのおはなしは、まだハシバミ山へ向かう途中の地点で語られているにもかかわらず、みんながすでに高い位置にいることを示す。さらに高いハシバミ山でも、祖母は、やはり、遠くを指

---

<sup>10</sup> 殻つきのままのハシバミの実。2008年初秋、筆者撮影。



(殻を割って開けた状態)

し示しながら説明やおはなしをする。

祖母は、子供たちに周囲を指し示し、山々の変わった名前について子供たちに話した。(KTS 252)

祖母は、空に向かって聳える、変わった形をした山頂がなぜそんな形になっているか謎解きをし、そこにのびるたくさんの尾根についても説明した。(KTS 252)

おはなしの内容は、民間伝承や童話等、多岐にわたる。そのなかには、子供たちが遠くの風景を実際に目にしながら聞くものが多く含まれている。

### 3.2 出会いの場・楽しみの場合

ハシバミ山で子供たちがまさしく「ハシバミの木の根」(Haselwurzel)に座って、祖母のおはなしを聞いているときに、ある大きな出会いがある。

金髪の子と黒髪の子が、だんだんと美しくなり、ジギスムントももう大きく成長した頃、みんなでまた高いハシバミ山に登り、太くて古いハシバミの木の根に(an der diken veralteten Haselwurzel)<sup>11</sup>座っていると、茂みのなかから見知らぬトビ色の子(ein fremdes braunes Kind)が出てきた。女の子だった。(KTS 257f.)

トビ色の子は、あらわれたのは一瞬で、すぐに去っていった。

その次にトビ色の子があらわれるとき、そのときも、子供たちが「太くて古いハシバミの木の根」に座しているときであった。

子供たちがもう一度あの太くて古いハシバミの木の根に座り、祖母がおはなしをしていると、あのトビ色の女の子が再びあらわれ、茂みから出てきて、そこで立ち止まって、子供たちを見つめた。(KTS 258)

このときもトビ色の女の子はすぐに去っていった。子供たちは、トビ色の女の子に会いたくて、ハシバミ山に登る。

子供たちはトビ色の女の子に会いたくて、前よりも度々、高いハシバミ山へ(nach dem hohen Nußberge)行きたがった。(KTS 258)

---

<sup>11</sup> 原文のまま。diken(= dicken)

それでもなかなかあらわれなかったトビ色の女の子が再びあらわれるのは、みんながやはり「ハシバミの木の根」に座しているときである。

祖母は子供たちといっしょに登った。何度も行っていたけれど、あの女の子の姿を見ることはなかった。ところが、あるとき、カゴをハシバミの実でいっぱいにして、ハシバミの木の根に座していると、あの女の子が茂みのなかから出てきて、立ち止まり、金髪の子の方を見た。(KTS 258)

子供たちとトビ色の女の子が小さなものを持ち寄る場面がある。ここにも、ハシバミの実がある。

子供たちは、トビ色の女の子に、きれいなものを持ってきた。トビ色の女の子は、子供たちに、さまざまな色の石や遅くに熟すブラックベリーを持ってきた。トビ色の女の子は、さらに、夏に集めておいたハシバミの実を胴着のなかに入れて持ってきたり、禿鷹のまだらのある羽根やカラスの黒い羽根を持ってきたりした。(KTS 283)

このトビ色の女の子が子供たちに持ってきたものは、ハシバミ山のなかの宝物にちがいない。石、ブラックベリー、鳥の羽根、そして、ハシバミの実。ハシバミ山のなかにある小さなものをとおして、子どもたちは交流している。

### 3.3 危険な場・守りの場

「ハシバミ」が人命を救う木になる場面がある。ハシバミ山で突然に大きな雹が降ってきたとき、祖母と子供たちが命を落とさなかったのは、トビ色の女の子がハシバミの木の下に小屋風の避難所を作ったからである。

空模様が変化しはじめたとき、山の天候をよく知る祖母でも、その予兆に気付かなかった。まだ空が明るかったとき、トビ色の女の子はどうしていたかという、ハシバミの茂みのなかを観察していた。

トビ色の女の子は、座っていた場所の近くを行ったり来たりしていた。たくさんのハシバミの茂みのなかを覗きこんでいた。絡みあった根の下方や、土の小さな窪みを見ていた。(KTS 262)

祖母は、森に入ると落雷の危険があると考えていた。

森のなかでは木々は雨避けになるかもしれないけれど、稲妻があると木々はかえっ

て危険になる。森に避難場所を探してはいけない。(KTS 261)

祖母は、ハシバミの話をし、ハシバミの木の下に子供たちを避難させる。

「よくわからないのだけど、子供たちよ」祖母は言った。「それが本当かどうかは。ただ、私の母親がたびたび話してくれたことには、聖母マリア様がいとこのエリザベト様のところへ山を越えていらっしゃるとき、ハシバミの木の下で雨宿りをなさったので、雷は決してハシバミの木には落ちないということだよ。さあ、私たちもよく茂ったハシバミを探そう。枝が東にあって、屋根がわりになって、幹が西に向いていて、そちらから降ってくる雨を防げるようなものを。その下で、雨の降っている間は座っていよう。そうすれば、雨にたいして打たれることもないし、私たちはさほど濡れないで済むだろう。それから、家に帰ろうね。」(KTS 262)

こうして、祖母と子供たちは、ハシバミの茂みを見つけた。そのとき、トビ色の女の子は姿を消していたが、再びあらわれる。

しばらくすると、トビ色の女の子は戻ってきた。手に柴の束(Reisighündel)をかかえていた。その柴の束は、細い枝や太い枝を束ねて乾燥させたもので、冬になると燃料にするために家に持って帰るものである。(KTS 262)

それから、トビ色の女の子は、ハシバミの場所を選んで、柴の束で小屋のようなものを作り始める。

トビ色の女の子は、やっと柴の束を運ぶのをやめ、そして、その柴の束で、小屋のようなものを作り始めた。西の方角に密生したハシバミがある場所を見つけ、そこに束を柱のように立て、今度はその上に、横方向に、積み上げた束から出してきた枝や棒を渡した。それをまた柴の束で覆い、さらに、柴の束をどんどん上に積み重ねていったので、なかに避難場所ができあがった。(KTS 263)

全員がここに避難の場所を変えた途端に、「成人でも殺せるくらい」(KTS 264)の大きな雹が降ってくる。木々を打ち砕く。しかし、この小屋風のものは、どうにか崩れずに済む。

柴の小屋の裏手にハシバミの木が密生しているので、風が吹きぬけず、枝がバラバラにならなかった。(KTS 265)

この小屋風の避難場所は最後まで雹を防ぎ、全員の命が助かる。トビ色の女の子の自然に対する予知能力と機転、そして、ハシバミの茂みが、人間の命を助けたといえる。

実際に、ヨーロッパには、ハシバミが雷を避けるという言い伝えがある。民間信仰では雷を避けると信じられていた。雷が鳴ったらハシバミの枝を窓に挿したり、畑にいるときに稲妻を見たら帽子に挿すとよいという。しなやかに曲がり、透過性がある性質からか、占い棒として水脈を見つけるのに使用されることもあるようである。<sup>12</sup>ハシバミは、長い歴史を持つ木であり、石器時代からヨーロッパ大陸に広く分布し<sup>13</sup>、人間と深く関わり、ケルト神話にも登場する。<sup>14</sup>

祖母は「本当かどうか」はわからないとしながらも、自分の母親から聞いた古い話をし、ハシバミの場所を探す。トビ色の女の子が小屋風のものを作るとしても、もし土台となる木がハシバミでなかったら、同じものを作るのは難しいかもしれない。ハシバミが密に生えていた場所を選んだことに加えて、枝がしなやかなことが役立ったと思われる。シュティフターは、実際のハシバミの茂みやハシバミの枝の性質を知っているからこそ、この救出方法を作品のなかに表現したにちがいない。

### 3.4 木を調達する場

ハシバミの茂みだけでなく、「柴の束」も、みんなの命を助けることに役立った。雹に打たれることを回避できた小屋風の避難場所の組み立てに使われたのは、柴の束である。秋のハシバミ山にはまだ柴の束があった。人間は、この柴の束を冬に燃料にする。子供たちの家には、薪置場がある。

馬車置場のすぐ隣に、冬暖房や料理のための薪のストックがたくさん積み上げてある薪置場がある。(KTS 298)

「材木」は、ハシバミ山に向かう途中の道にも置かれている。

子供たちは、父親が多くの箇所を改修させておいた砂の道を通り、先へと進んだ。さらに、子供たちは、夏の間に切られた材木のそばを通り、砂の道をしばらく行くと、再び森の外に出た。(KTS 250)

---

<sup>12</sup> Susanne Fischer-Rizzi: Blätter von Bäumen. Legenden, Mythen, Heilanwendung und Betrachtung von einheimischen Bäumen. München (Irisiana) 1993, S.87-91. [初版 1980]

Walter Sperling: Bäume und Wald in den geographischen Namen Mitteleuropas: Die böhmischen Länder. Leipzig (Leipziger Universitätsverlag) 2008, S.113.

<sup>13</sup> 塚田松雄: 花粉は語る—人間と植生の歴史— (岩波新書) 1974, 107 頁。

<sup>14</sup> 井村君江: ケルトの神話 女神と英雄と妖精と (筑摩書房) 1983, 127 頁。

人間は、生活に必要な木を森から運んでいる。子供たちが「苺」(Erdbeeren)を摘んで入れる場で、子供たちは「白樺の樹皮の小さなバッグ」(Birkenrindentäschchen)(KTS 290)を持っている。そのバッグも、森にある白樺から作られているのであろう。

### 3.5 人間が完全には把握できない場

子供たちの父親は、嵐の後に、トビ色の女の子にお礼を言いたくて、居場所を探す。父親は、狩人(Jäger)にたずねる。

狩人は、野や森や牧草地をよく歩きまわって、そこにあるあらゆることを知っているはずだった。

しかし、狩人も何も知らなかった。

狩人の話によれば、ジプシーの一座がいたが、彼らはいつもバイエルンの方にのびているもっと高い森のなかに(in den höheren Wäldern)いて、彼らは森のふちに滞在し、そこに沿ってさまざまな国をさまようということであった。向こう側の地方のその狩人の隣人も何も知らないということであった。(KTS 280)

狩人の話は、トビ色の女の子が「もっと高い森のなかに」いる可能性を示唆している。しかし、森に詳しいはずの狩人たちもトビ色の女の子については何も知らない。父親は、わからないまま帰る。

トビ色の女の子がハシバミ山を下り、子供たちの家に来るようになった頃、再び、父親はこのトビ色の女の子について調べようとする。そのときも、森をよく知っている「きこり」(Holzhauer)にたずねるが、トビ色の女の子については何も知ることができなかった。

物語の最後まで、トビ色の女の子がどこからやってきたのか、誰にもわからないままである。

このように、ハシバミ山は、人間の楽しみのある場であり、生活に必要な木をもたらしてくれる場である。人間の成長や暮らしと深い関わりを持つ場となっている。その一方で、嵐が猛威をふるう危険な場であり、人間が全てを把握しきれない場としてあらわれている。しかも、ハシバミの茂みは、すさまじい嵐がやってくる危険な場でありながら、子供たちを突然の雹から守る場にもなっている。

シュティフター文学において森が人間にとって危険な場であり、かつ人間を守る場であるという両面性は、シュティフター研究のなかで指摘されてきた。Cornelia Blasbergは「シュティフターの『高い森』から『ヴィティコー』までの小説では、人間を守る場であり、危険な場でもあるという森の二つの顔が、テーマになっている」<sup>15</sup>と述べてい

---

<sup>15</sup> Cornelia Blasberg: Erschriebene Tradition. Adalbert Stifter oder das Erzählen im Zeichen verlorener Geschichten. Freiburg (Rombach) 1998, S.161.

る。ヴァルター・ヘッチェも「シュティフターのほとんど全ての短編小説・長編小説において、森は、故郷や待ち望まれる安心感の権化であり、その一方で、迫る危険の権化でもある」<sup>16</sup>と述べている。

どちらの研究のなかでも、主に『高い森』 („Der Hochwald“, 1842)や他作品の森が取り上げられており、『白雲母』は『『高い森』から『ヴィティコー』まで」や「ほとんど全ての短編小説・長編小説」のなかに含まれている。『白雲母』のハシバミ山の森は、森という観点からのシュティフター研究のなかでは、目立たない存在である。『高い森』『森の小径』 („Der Waldsteig“, 1845)『森ゆく人』 („Der Waldgänger“, 1847)『森の泉』 („Der Waldbrunnen“, 1866)というように、シュティフターの作品のなかには題名に「森」が付いていて森が舞台となっている作品が多くあり、森という点で、『白雲母』はこれらの作品の陰になっている。<sup>17</sup>また、『白雲母』においては、森は、「ハシバミ山」という言葉のなかに隠れる。<sup>18</sup>

とはいえ、この『白雲母』のハシバミ山には、シュティフターの描く森の特性として指摘されている「危険」と「守り」という二つの面が、はっきりとあらわれている。しかも、『白雲母』のなかではハシバミという具体的な種類の示された木が山を代表するほどの存在であられ、ハシバミの茂みの存在が子供たちを「守る」ことにつながっているという点で、シュティフター文学のなかの森を考える上でも、「ハシバミ山」は重要な場所であるといえる。

## 4 ハシバミ山と家とをつなぐ道

### 4.1 ハシバミ山までの距離

夏の終わりのハシバミ山への道の描写には、どのような場所を通るか、どのような動植

---

<sup>16</sup> Walter Hettche: Der Wald im Text, der Wald als Text. Aspekte der Walddarstellung in Stifters Erzählwerk. In: Waldbilder. Hrsg. von Walter Hettche u. Hubert Merkel. München (Iudicium) 2000, S.26.

<sup>17</sup> ヴォルフガング・マッツは、シュティフターの伝記を著すなかで森の章を設けている。そこでは、『高い森』を中心に論じている。マッツのその部分を受け、アルブレヒト・レーマンも、シュティフターの森の作品として『高い森』を挙げている。

Wolfgang Matz: Adalbert Stifter oder Diese fürchterliche Wendung der Dinge. München u. Wien (Hanser) 1995, S.147-163.

Albrecht Lehmann: Mythos Deutscher Wald. In: Der deutsche Wald. Der Bürger im Staat. 51. Jahrgang Heft1. Hrsg. von der Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg. 2001, S.5.

<sup>18</sup> ヴォルフガング・バウムガルトは、『白雲母』の森について言及するとき、主として、ハシバミ山の森ではなく、ハシバミ山へ向かうなかで出てくる針葉樹の森やベリー類の生える森について言及している。

Wolfgang Baumgart: Der Wald in der deutschen Dichtung. Berlin u. Leipzig (Walter de Gruyter) 1936, S.101.

物が存在するのかが記されている。<sup>19</sup>

子供たちは家から出て、果樹の下を通り、ガラス温室の裏の「砂地斜面」から岩場を登り、ベンチのあるところまで来る。さらに上に登っていくと、土の地面が再び出てくる。ここには「ヒース」(Haidekraut)<sup>20</sup>をはじめとする草が生え、「<sup>びやくしん</sup>柏槨」(Wachholderstrauch)<sup>21</sup>や「白樺」(Birke)の幹があり、「アザミ」(Distel)も生えている。さらに進むと「スローベリー」(Schlehen)や「ハンノキ」(Erlen)が密生しているところがある。そこには昆虫がおり、「ホオジロ」(Ammer)「ミソサザイ」(Zaunkönig)「ククイタダキ」(Goldhähnchen)といった鳥の声がする。

その先に、「白樺」が多く生えている場所がある。さらに先に進んでいくと、「オーク」(Eichen)がある。その次に、針葉樹の森があり、そこには、「松」(Föhren)「トウヒ」(Fichten)「樅」(Tannen)が生えている。

さらに進むと、新たな森がある。暗い森で、「キノコ」(Schwämme)や「苔むした石」(Moossteine)があり、「ブルーベリー」(Heidelbeere)「ラズベリー」(Himbeere)「ブラックベリー」(Brombeere)といったベリー類が生えている。

この森をぬけると、太陽があらわれ、石の多い灰色の草地に出る。その先は谷になっている。その草地斜面の窪地に「小川」が流れている。

その小川には「セキレイ」(Bachstelze)があらわれる。この小川の向こうに聳えるのが、「ハシバミ山」である。

ハシバミ山へと続く道が、多くの動植物とともに、丁寧に描写されている。子供たちは、

<sup>19</sup> 作品のなかでは、「木」だけをとりまいても、以下のように、種類が具体的に出てくる。家の周りからハシバミ山まで、多くの木々がある。

| ↑      | ダーク<br>チェリ<br>ー | サワー<br>チェリ<br>ー | ナシ | リンゴ | スグリ | 桃・杏 | 菩提樹 | 柏槨 | 白樺 | スロー<br>ベリー | ハンノ<br>キ |
|--------|-----------------|-----------------|----|-----|-----|-----|-----|----|----|------------|----------|
| ハシバミ山  |                 |                 |    |     |     |     |     |    | ○  |            | ○        |
| 小川のほとり |                 |                 |    |     |     |     |     |    |    |            |          |
| 暗い森    |                 |                 |    |     |     |     |     |    |    |            |          |
| 針葉樹の森  |                 |                 |    |     |     |     |     |    |    |            |          |
| 途中の道   |                 |                 |    |     |     |     |     | ○  | ○  | ○          | ○        |
| 家のまわり  | ○               | ○               | ○  | ○   | ○   | ○   | ○   |    |    |            |          |

| ↑      | オーク | 松 | トウヒ | 樅 | ブルー<br>ベリー | ラズベ<br>リー | ブラッ<br>クベリ<br>ー | コケモ<br>モ | ヤナギ | トネリ<br>コ | ハシバ<br>ミ |
|--------|-----|---|-----|---|------------|-----------|-----------------|----------|-----|----------|----------|
| ハシバミ山  |     |   |     |   |            |           |                 |          |     | ○        | ○        |
| 小川のほとり |     |   |     |   |            |           |                 |          | ○   |          |          |
| 暗い森    |     |   |     |   | ○          | ○         | ○               | ○        |     |          |          |
| 針葉樹の森  |     | ○ | ○   | ○ |            |           |                 |          |     |          |          |
| 途中の道   | ○   |   |     |   |            |           |                 |          |     |          |          |
| 家のまわり  |     |   |     |   |            |           |                 |          |     |          |          |

<sup>20</sup> 原文のまま。Haidekraut (= Heidekraut)

<sup>21</sup> 原文のまま。Wachholderstrauch (= Wacholderstrauch)

さまざまな場所を通り、さまざまなものを見ながら、ハシバミ山へ向かう。<sup>22</sup>ハシバミ山は、高さがあるだけでなく、距離の点でも子供たちの家から離れているといえる。

#### 4.2 子供たちの視点

子供たちが行った草地にある「忘れな草」(Vergißmeinnicht)の花の部分が、比喻で表現されている箇所がある。

忘れな草が咲いていた。それらは、魚の澄んだ小さな目が波間からこちらを覗いているかのように(wie klare Fischäuglein aus den Wellen schauen)で、摘んで水のなかに入れておくと、長い間、母親のテーブルの上で咲いていた。(KTS 257)

忘れな草の小さな花の集まりが、魚の小さな目に喩えられている。地面に生えている花々から水のなかに生きる魚が連想されるこの場面は、子供たちの視点から描かれているといえよう。この引用箇所の次の段落で、子供たちが小川の水を覗く場面が描かれている。

子供たちは自分たちだけでも小川に行くのが好きだった。小川は穏やかに流れ、さまざまな形の小さな波がたっていた。子供たちが底の砂を覗くと、太陽が水を抜けて川底にあたり、砂のなかの石の薄片や粒は輝いて、金のように(wie Gold)みえた。

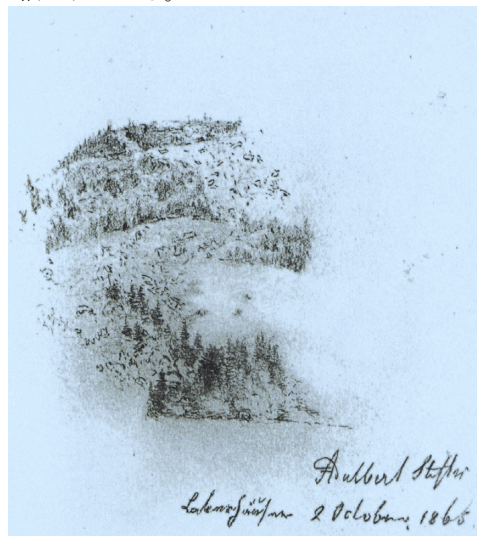
---

<sup>22</sup> ハシバミ山に続く道の木々を想起させるシュティフターの鉛筆デッサンがある。それぞれ、さまざまな種類の木々が描かれている。

『木々の習作』は、『白雲母』の成立と同じ頃に描かれている。



『木々の習作』1852-1855 年頃



『森の斜面』1865 年

Franz Baumer (1979): a.a.O., S.117., S.133.

シャベルで砂をすくって、よくすすいでみると、薄片は白雲母で、粒はケイ石の真っ白なかけらだった。(KTS 257)

子供たちは、小川を身近なものとして、観察している。体を近づけて、小川を覗いたり、水に触れていることがわかる。この子供たちの視点からの描写は、嵐が過ぎ去った直後のハシバミ山の描写のなかにもある。

子供たちは、風が枯れた草や葉っぱや他のものをハシバミの木々のなかに吹き飛ばした様子を見た。子供たちは、山に茂みはなくなり、ただ太い幹だけになっている様子を見た。子供たちは、草はなく、ただ黒い土が水を含んで泥になっている様子を見た。白い雹が積もって、土を隠しているところもあった。それは、太陽のあたる場所だけ雪がとけてなくなっている春の雪の斜面のようであった(wie im Frühlinge die Schneelehnen liegen)。子供たちが雹に触ると、雹はとても冷たかった。そして、よく見てみると、雹はガラス玉のようにきれいで(so schön wie eine Glaskugel)、なかに小さな雪のかたまりが入っていた。山のいたるところで雨水が流れていた。(KTS 266)

「子供たち」が「見た」ものは、ハシバミ山の荒れ果てた様子であった。このとき、子供たちは、変わり果てたハシバミ山を直視していることになる。そのなかで、雹の降った地面は、雪が部分的にとけている「春」の斜面に喩えられている。さらに、命を脅かした雹そのものは「ガラス玉のようにきれい(だ)」と表現されている。子供たちが見た荒れ果てた光景と、子供たちの視点における「きれい(だ)」という表現とは対照をなす。「きれい(だ)」という言葉は命を脅かした雹に一見そぐわない印象を受けるが、子供たちは、自分たちが感じたままに雹を見ているといえる。

このように、子供たちが行った場所の描写のなかに、子供たちの視点からの比喩表現が出てくる。子供たちの視線の先の対象は、地面のそばで咲く忘れな草、小川の川底、地面の雹である。それらは、低い位置にあり、子供の目線のすぐ近くにあるものである。子供たちは、それらを実際に見て、触る。

作品のなかで、ただ詳しく自然が描かれているというだけでなく、子供たちの目線で捉えたものが作品のなかで描かれることで、子供たちの見方、周囲の自然に対する捉え方が表現されている。ハシバミ山が嵐によって様相を変化させても、子供たちはそのままの自然の姿を受け入れていることがうかがえる。

#### 4.3 小川の変化

子供たちの目線のそばにある小川は、ハシバミ山と家とをつなぐ道にある場所のなかでも、作品によく出てくる場所である。ここでは、この小川の描写に着目する。

小川は、ふだんは、穏やかな小川である。

子供たちは小川のところにやってきた。小川のなかには、灰色の小さくてすばしこい魚が泳いでいて、青色のきれいなトンボがその周りを飛びまわっていた。(KTS 250)

子供たちは灰色の小さな魚やトンボのいる小川を渡った。(KTS 253)

この小川は、嵐の後は次のように変化する。

小川のほとりにきてみると、灰色の魚が泳ぎ、トンボが飛んでいるいつもの小川はなかった。濁った水でいっぱい、その上を雹によって打ちくだかれた木やたくさんの緑色の葉や草が流れていた。ふだんは、小川のほとりに小さな茂みがあって、夏には赤い花を咲かせ、花が落ちると、きれいな白い穂をつける。今や、その茂みは、すっかり水につかって、その頂点がわずかに見えるだけであった。(KTS 267)

小川のふだんの様子と嵐の直後の様子とが対比されている。この対比が、小川とその周りの風景がどれほど変貌したかを伝えている。

この氾濫した小川は、子供たちが渡れないほどの水の量になって、末っ子のジギスメントはトビ色の女の子に抱いてもらい、渡る。全員が無事渡りきったときには、さらに水の量と勢いが増していた。

子供たちは川を振り返った。茂みの頂点はもう見えなかった。川幅がさらに広がっていた。川は、木々や葉や何かわからない黒いものを浮かべ、激しい勢いで流れていた。(KTS 268)

その後、子供たちが再びハシバミ山へ登るときも、嵐の爪痕がまだはっきり残っている。

草地の小川は、水かさが減っていたが、まだ澄んでおらず、濁っていた。ヤナギの枝が打ち落とされて流されていた。岸辺は泥と水でいっぱい、死んだ魚が白い腹を上に見せていた。(KTS 279)

次に小川の描写が出てくるとき、いつものあの穏やかな様子に戻っている。

日があたたかく輝き、空が青かった。草地の小川の水が澄んでいた。そのなかで灰色の小さくてすばしこい魚が遊んでいた。(KTS 281)

窪地にある澄んだ小川では、灰色の小さくてすばしこい魚が、夏と同じように楽しそうに泳いでいた。(KTS 282)

灰色の小さな魚がいる小川の描写をこのように並べていくと、荒れ果てた状態からいつもの状態に戻っていく小川の再生の姿が浮かび上がる。小川の描写のなかに自然の再生への流れが読み取れることは、物語の結末で意味を持つ。物語の最後の風景のなかにあるのが、この小川とハシバミ山である。次に、ハシバミ山の再生をみる。

## 5 「ハシバミ山」と「自然の流れ」

一度、雹によって枝が折られた木々はすぐには回復しない。<sup>23</sup>木々の枝がない状態が、嵐の後の様子のハシバミ山へ向かう道の描写のなかにある。

みんなは、枝がなくなった木々のそばを通過して、分け入っていった。冬の間ずっとその姿のままになってしまう木々の姿は、見ていて悲しかった。(KTS 280)

トビ色の女の子が再びハシバミ山であらわれるときも、「枝も葉もなくなった」木々のなかからあらわれている。

トビ色の女の子が、枝も葉もなくなったハシバミや白樺やトネリコの木々のなかから走り出てきた。(KTS 281)

---

<sup>23</sup> シュティフターは自然の猛威により破壊された様子をしばしば絵に描いている。



『倒された木の根』1845 年

Franz Baumer (1979): a.a.O., S.107.

そのような木々がいつ再生したかという、次の年の夏である。夏のハシバミ山の描写のなかに次のような箇所がある。

ハシバミや白樺やトネリコやハンノキの打ち砕かれた木の幹は、樹液をめぐらせ、なくなった枝のうめあわせをしようとし、他の枝は、はやく生長し、太くなり、ハシバミ山でこれまで見たことがないほど大きく、そして色の濃い葉をつけた。(KTS 289)

木々がもとの姿を越えて、さらに強くなっている。木々の生命力をここにみることができる。



『木の幹』 1833-1835 年

(画：シュティフター)<sup>25</sup>

ジギスムントがトビ色の女の子のことを思うところで、物語は終わる。その最後の場面に、小川やハシバミ山が出てくる。

それでも、みんなあの女の子のことを決して忘れることができなかった。みんな、特に子供たちは、いつも、あの子のことを話した。そして、長い年月が経過した。祖母は亡くなり、父親も亡くなり、母親は祖母になり、姉たちは遠くへお嫁に行った。ジギスムントは、丘の上に立っていると、灰色の小さな魚がいる小川も、あの

木々は、嵐によって枝を打ち落とされても、傷跡を深く残しながらも、季節がめぐるなかで再生する。この自然の流れ・リズムが作品のなかに表現され、木の持つ力とともに、自然の循環性が作品のなかに描き出されていることがわかる。

嵐の直後の帰り道、子供たちといっしょに家の近くまで来たトビ色の女の子は、その後、少しずつ子供たちの家や家族に慣れていく。子供たちの家が火事になったとき、逃げ遅れた末っ子のジギスムントを救出したのは、トビ色の女の子だった。<sup>24</sup>トビ色の女の子は、家族の一員のように過ごしていたが、突然ハシバミ山へと走り去り、姿を消す。

<sup>24</sup> 火事するとき、家のそばにある「二本のりっぱな菩提樹」(KTS 297)が、子供たちのいる場所に火の粉が飛んでくるのを防ぐ。ここでも木が子供たちを守るものとしてあらわれている。

<sup>25</sup> Franz Baumer (1979): a.a.O., S.43.

高いハシバミ山ももう小さくなったように感じた。そのとき、トビ色の女の子の影が自分のそばをさっと通りすぎて行くような気がした。彼は心の中に深い痛みを覚えた。きっと幾度も、あの子はこのあたりにやってきて、遊び友達の僕たちが来るのを一人で待っていたにちがいない、そして、あの子は新しい世界で知った痛みをもとの世界へどのように持ち帰ったのだろうと、考えた。彼は、どうかあの子にたくさん幸福が与えられていますようにと願った。(KTS 315)

嵐の後にトビ色の女の子に抱いてもらわなければ渡れなかった「灰色の小さな魚がいる小川」、そして「高い」と作品のなかで表現されてきた「ハシバミ山」を、大人になったジギスムントは、小さくなったと感じる。それだけの時間が過ぎたということである。この作品のなかで何度も描写されてきた場所が、物語の結末で、「長い年月が経過した」ことを強調する。小川とハシバミ山は、人間に何が起ころうと、やすみなく続いていく大きな自然の流れを象徴している。

ハシバミ山にこれからもずっと時間は流れ、ハシバミの木は、これからも、毎年、その季節になると実をつけるだろうと予測させる。ハシバミ山は、そのような自然の大きな流れのなかにあることを想像させ、自然の時間を内包する風景となってあらわれている。それは、ハシバミ山とその周辺の四季の変化が描写されているだけではなく、ハシバミ山という場所でハシバミの木とともに子供たちが過ごした時間や、ハシバミ山やそこに行くまでにある小川の再生が作品中に描出されているからではないだろうか。

## 6 おわりにー生命の木

これまでみてきたように、ハシバミという木は、物語に決定的な影響を及ぼしている。ハシバミの枝が密に茂っていなければ、小屋風の避難場所が作りにくく、突然に降ってきた勢いのある雹から子供たちは逃れることができなかったかもしれない。ハシバミの実を子供たちが採れるようにと祖母が少し高い部分の枝を下へ向ける場面は、祖母の子供たちを思う気持ちがさりげなくあらわれている。こういった場面も、ハシバミという木が実を枝につけるもので、しなやかな枝を持つという性質がないと成立しない。トビ色の女の子が以前に集めていたハシバミの実を子供たちに持ってくる場面もある。もし実が殻を持つものでなかったとしたら、保存や持参が難しい。ハシバミの木の持つ性質が、人間の生命を救い、子供たちにささやかな交流をもたらしているといえる。

さらに、この作品では、ハシバミの多く茂る森が、人間の住む場所から離れ、人間の住む場所より高い場所にあることには大きな意味があると考えられる。木々に覆われたハシバミ山が人間にとって全てを把握できる場所ではないということを、距離や高さがより際立たせている。この距離や高さが、ハシバミ山をどれだけ知っていても突然の雷雨や雹か

らの避難が難しいこと、ハシバミ山に消えていったトビ色の女の子の消息がわからないままであることにつながっていき、ハシバミ山は、神秘性を保持し続ける。薪や材木等を人間の生活にもたらず場でありながらも、ハシバミ山は人間から支配される場所にはならない。ハシバミ山は、人間に何が起ころうとも、持続していく大きな自然の流れのなかに入り、続いていくものとしてあらわれている。

シュティフターは、『石さまざま』序文のなかで、自身の文学の使命を明らかにした。『白雲母』は、『石さまざま』作品集のために唯一書き下ろされた作品であり<sup>26</sup>、序文の内容が色濃く反映されていると思われる。序文のなかで、シュティフターは、「生命の木の何百万もの根の繊維」(die Millionen Wurzelfasern des Baumes des Lebens)のように「持続的で根源的なもの」に、大きな価値を置いている。<sup>27</sup>ハシバミ山のハシバミは、まさしく「生命の木」である。シュティフターの樹木への思いや樹木についての観察がハシバミ山の描写に結びついていると考えられる。

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

---

<sup>26</sup> Adalbert Stifter: Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe, Apparat und Kommentar (1995). a.a.O., S.171.

<sup>27</sup> Adalbert Stifter: Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. (1982). a.a.O., S.14.